

産業能率大学

[SANNO UNIVERSITY]

2020年度から実施する画期的な英語教育プログラムで英語への苦手意識を一掃する



リチャード川口先生の模擬授業の様子

どの大学でも英語教育に力を入れようとしている。しかし、その方向はまちまちだ。eラーニングや海外とつないだオンライン英会話の導入、さらには英会話スクールとの連携に進む大学もある。そんななかで産業能率大学は、まったく新しい英語教育プログラムの開発・導入という方向に舵を切った。そのプログラムの全貌をレポートする。

取材・文／教育ジャーナリスト 友野 伸一郎

リチャード川口先生のメソッドを活用し、産業能率大学が共同開発したプログラム

産業能率大学は英語教育の改革に取り組んできた。その過程では、英会話スクールとの連携なども検討してきた経緯がある。しかし、さまざまな選択肢を検討するなかから生まれた結論が、2020年度からスタートする新しい英語教育プログラムである。それは、「発音の鬼」として知られるリチャード川口先生のメソッドを、産業能率大学の英語教員チームがシェアして指導するというものだ。

この英語教育プログラムの外形的な特徴を簡潔にまとめると以下のようになる。

- ①1年生全員必修の週2回の授業。
- ②リチャード川口先生の映像教材による授業を毎回全クラスで行い、その内容を踏まえたリアル授業を産業能率大学の専任教員が各クラスで展開する。
- ③映像教材とテキスト3冊を含む全教材は、リチャード川口先生と産業能

率大学の英語教員チームとで共同開発する。

ここから見て取れることは、これまでの大学の英語教育で散見された問題、例えば教員によって指導する内容がバラバラになるといった問題を克服し、統一したレベルと内容において英語教育が全学生に提供されるということである。

また、外部の英会話スクールなどに全面的に委託すると、大学側の実情に合った内容へコントロールしていくための主体性を喪失してしまう懸念が生じるが、専任英語教員がリチャード川口先生とメソッドや教育方法を共有し、同時に全クラスでのリアル授業の展開を担うことにより、大学としての主体性を確保し教育内容のレベルと質を担保できる。

楽しくなければ学べない、学べなければ楽しくない

では、なぜリチャード川口先生のメソッドをこのプログラムでフィーチャーして

いるのか。それが、このプログラムの内容的な特徴となっているので、以下、詳しく説明しよう。

リチャード川口先生は「発音の鬼」として知られる、カナダ生まれの日系カナダ人。アメリカ、オーストラリア、日本で育ち、カナダにいる日本人留学生向けのTOEIC専門校を経て、2013年に東京・お茶の水に「RK English School」を設立した。TOEIC専門校では、1カ月で全学生の平均スコアを180点向上させたという「伝説」を持ち、留学しなくてもネイティブと対等に会話できる独自のアプローチを開発している。

そのリチャード川口先生のメソッドを活用して、産業能率大学が新しく始める英語教育プログラムでは、授業は「楽しくなければ学べない。学べなければ楽しくない」をモットーに、英語でのアウトプット中心に進められる。

そこでのメソッドは①発音②英語脳③表現の3つに分けられる。

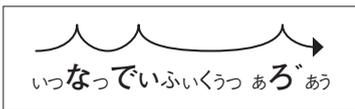
①の発音では、英語の発音と日本語の発音の違いを踏まえ、ネイティブが自

図1 発音をマスターするための全体像



然に行っているが、日本では教えられていない発音のコツを徹底的に身につける。

例えば、「It's not difficult at all.」という英文を発話するとしよう。日本の英語教育では、多くの場合「いつ のつとでいふいかると あつ おーる」と発音してきた。しかし、実際のネイティブの発音では「いつ なつ でいふいくつ あるあうー」



となる。これに強弱の記号をつけたのが上の図だ。これでは前者の発音をイメージしている日本人にはまったく聞き取れないし、ネイティブとの会話を通じないのも無理はない。

つまり、日本人の多くが英語のリスニングができない理由は、自分がイメージしている英語の発音と、実際のネイティブの発音との間にあまりに大きな落差があるからなのである。

では、どうしたらいいのか。

ネイティブの発音を徹底的にマスターしていくのである。それがリチャード川口先生の開発した独自のメソッドのポイントでもある。

このプログラムでは図1のように英語の発音を具体的に分析する。まず、日本語にはない母音や日本人が苦手な子音を発音できるようにする。そして、音のつながり方や短縮の仕方などの基本をマスターし、さらに英語のリズムを

「フリ」として理論的に解明して身につけるのである。

こうして、英語の発音ができるようになるとネイティブスピーカーにちゃんと伝わるし、相手の言っていることもわかるようになる。そうすれば英語が伝わる楽しさを感じることができるようになるのである。

表現は模範解答で縛らず、キャラクターごとに違っている

そして次が②英語脳である。このメソッドでは、英語でアウトプットすることから始まる。日本では高校までの英語教育の結果として「間違っていたらどうしよう」とアウトプットをためらうカラを作ってしまう。だからこそ、このメソッドでは「自分だったらこう話す」というところに自分のカラを壊して一歩踏み出すのである。つまり、「相手に何を伝えたいのか」を考えれば、英語表現は模範解答だけでなく何通りもあるはずだ。そして、すでに学生は自分流ならアウトプットできる能力を持っていることを前提にして、アウトプットした表現をブラッシュアップして伸びしろを伸ばす、という考え方がベースとなっている。

ここでもう一つ大切なポイントは、「唯一の模範解答でなくてもいい」ということを積極的なプラス面として位置づけていることだ。つまり、

英語の表現には「発話する主体」すなわち、学生の個性が表現されているのが自然なのだと言いつけると、学生の数だけキャラクターを持った表現があつていいことになるし、他の学生の表現からも学べることが多い。つまり、グループで学ぶことが、「マンツーマンで学ぶのはコストがかかるから」

という消極的な面よりも、もっと積極的な意義を持つということである。そうなると教室内でのリアル授業では、先生の役割は正しい表現を一方向的に学生に伝えることではなく、図2のメソッドを使い、学生たちの英語の発話をつなげるファシリテーターへと変化していくのである。

自分の表現がレーダーのどこに位置づくかを考え、幅を広げる

もちろん、個々の学生の個性を持った英語表現でいいと言っても、どんな表現でも構わないというわけではない。当然、実際の英語として通用する範囲内における表現の一定の幅の中で、という制限はある。そして、メソッド②英語脳でアウトプットすることへの戸惑いを乗り越えたら、次はメソッド③で表現の幅を身につけることが大切になる。ここでは、自分がアウトプットしたものが、数ある英語表現のうちでどのあたりに位置づけられるかを考える。

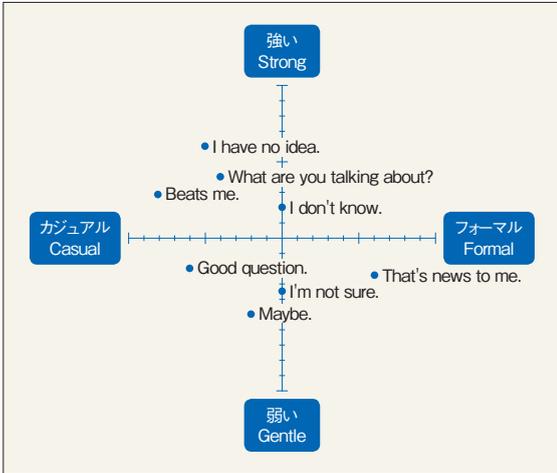
図3は、その時に用いる「表現レーダー」である。このレーダーは、縦軸を「強いー弱い」とし、横軸を「フォーマルーカジュアル」としているが、例えば「知らない」の英語表現「I don't know.」をこのレーダーのある部分に置いてみる。そして他の表現「I'm not sure.」「I have no idea.」「That's news to

図2 英語脳「カラ」を壊すためのスイッチ

| | |
|--------|---|
| リフレーズ | 表現したい内容が英語で出てこなかったら、日本語でもよいので、別の簡単な表現に言い換えてしまえば良いのである。鍵は知識よりも柔軟さ。 |
| 英語順思考 | 英語は日本語と語順が真逆なので、実は日本語→英語はハードルが高い。英語の語順を解剖し、直接英語で考える仕組みを手に入れる。 |
| 飛び道具 | “Beats me.”(わからない) “Break a leg.”(頑張れ)などは、塊の表現。このような小慣れた飛び道具もタイミングよく使えるように吸収していく。 |
| 未完スタート | 主語が動詞を決め、動詞が次に来るものを決める「引力」のつとり、主語が決まれば未完状態でも声に出し、考えながら喋れる状態を作る。 |
| 世界語思考 | 英語は世界中の人が共通語として使う「世界語」。そもそも完璧であることよりも「伝われば100点」という前提を共有する。 |

これらのテクニックを駆使して、学生達の「アウトプット力」を最大限に引き出していく

図3 「知らない」の表現レーダー図



me.」「What's are you talking about.」などが、どこに位置づけられるかを考える。

そして、この表現レーダーも正解を求めるといよりも、自分で考えてみることに力点が置かれている。同時に、同じ意味の英語を別の英語表現に置

テストベースで英語を嫌いになる教育を越え、インプット中心からアウトプット中心へ

産業能率大学で、このような英語教育プログラムを展開するのはなぜだろうか。「僕が主催するRK English School

き換えるため、日本語を介さず「英語で英語を学ぶ」ことになり、②英語脳の強化と往還しつつ英語力を高める効果がある。

このように、①発音②英語脳③表現の3つができるようになれば、誰でも英語が話せるようになり、得意になっていくというメソッドなのである。

に通ってくる人は、英語力を切実に必要としていて、すぐに上達する必要がある人が中心です」とリチャード川口先生は語る。

大学では、それほどの切実性はないかのように見えるが、実は、ほとんどの学生の将来には英語が必要とされると考えられている。そのことは学生自身も自覚している。

しかし、高校までの英語教育はインプットが中心で、アウトプットは試験の場というケースが今でもほとんどだ。英語が嫌いになってしまっている学生も少なくない。そこを大学時代に覆していくことが、この英語教育プログラムの最大のねらいである。

テストベースの英語から抜け出し、学生が英語を好きになることを目指す。好きになると自主的にでも英語を学んでいこうになる。そのスイッチを入れるのが、産業能率大学の画期的な英語教育プログラムなのである。

「楽しくなければ学べない！ 学べなければ楽しくない！」 英語が伝わる楽しさを経験してカラを破っていく授業です

日本では、英語というと「間違えてはいけない」と堅苦しく考えて自分を呪縛し、その結果、英語が口から出てこないのかもしれないと思ってきました。僕の目指す英語は、そんなカラを抜け出して、アウトプットが楽しくなる英語です。

だから、モットーは「楽しくなければ学べない！学べなければ楽しくない！」。

アウトプットというと、テストや入学試験しか経験がなくて、英語でのアウトプットがすっかり苦手になったり、嫌いになってしまったりする学生がたくさんいます。そんな学生たちにも、英語が伝わる楽しさを経験してもらって、大きくカラを破ってほしいと考えています。

僕は、カナダで生まれ日本とオーストラリアとアメリカで育った経験から、どうして日本人が英語ネイティブの発音が聞き取れないのかも、体験的に理解してきました。それを理論化してメソッドにまとめ上げ、今までにカナダと日本で3000人以上に英語を教えてきました。ネイティブの発音を自分のものにする秘訣やコツをつかめば、喋るこ

とも聞いて理解することもできるようになります。来年度から開始される産業能率大学の新しい英語教育プログラムは、そのメソッドを活かし、かつ産業能率大学の学生に必要な内容を織り込んで新たに開発したものです。開発は、大学の専任の先生方と協働して進めていますが、このプロセス自体も新しい発見に満ちた素晴らしいものです。

学生たちは、グローバル化が進む社会に出ていきます。ほとんどの学生が将来、英語が必要になるはずで、社会に出る前に、大学で

本当に使える英語を学んでおくことが、今ほど大切になっているときはないと思います。

この新しいチャレンジ=産業能率大学の英語教育プログラムに注目してください。



産業能率大学 客員教授
リチャード川口
主な著書に『日本人のためのネイティブ英語勉強法』(株式会社KADOKAWA)『バンクーバー 発音の鬼が日本人のためにまとめたネイティブ発音のコツ33』(明日香出版社)など



産業能率大学の英語プログラムの紹介動画をこちらからご覧ください。



https://www.sanno.ac.jp/undergraduate/learning/global_program/sanno_english_program.html

